

## 問題・目的

ネガティブな刺激に対して注意が偏る注意バイアスは、不安や抑うつ<sup>1</sup>の長期化や重症化への関与が指摘されている。その改善法として注意バイアス修正法（ABM）が開発されてきたが、研究間で効果は一貫していない。したがって、安定的な効果をもたらす新たな介入法の開発が課題となっている。その課題に対し、不安を対象とした研究において、リアルタイムのフィードバックを取り入れた訓練、A-FACT（Bernstein & Zvielli, 2014）が開発され効果が確認されている。このようなフィードバックをともなう注意訓練は、不安と同様に注意バイアスの影響を受けるとされる抑うつ<sup>1</sup>に対しても有効である可能性が考えられる。しかし、抑うつ<sup>1</sup>を対象とした訓練において、リアルタイムのフィードバックを導入した研究はいまだ行われていない。本研究の目的は、リアルタイムのフィードバックを取り入れた注意訓練が抑うつ<sup>1</sup>の改善に有効であるかを明らかにすることである。訓練の効果として、注意バイアスの減少および抑うつ<sup>1</sup>気分の減少が予測された。

## 方法

大学生 23 名（男性 10 名，女性 13 名）が実験に参加した。質問紙によって抑うつ気分（J-DSC-R）、反すう（日本語版 RRS）、不安（日本語版 STAI）を測定し、個別 PC 実験にて注意バイアス（ドット・プローブ課題）の測定、訓練を実施した。フィードバックあり訓練群、フィードバックなし訓練群、統制群（訓練は実施しない）の 3 群に分け、訓練前と同じ指標を再度評価し、各群の前後差を比較した。

## 結果・考察

結果として注意バイアスの減少や抑うつ<sup>1</sup>気分の低下は確認されなかった。反すうや特性不安についても、同様に変化は見られなかった。唯一、状態不安においてのみ、フィードバックなし群で訓練前と比較して訓練後の値が減少していた。この結果は、フィードバックあり群で求められた試行ごとに反応の正確性を確認する手続きが、課題の遂行過程に追加的な心理的負荷を与えていた可能性を示唆する。一方、フィードバックなし群ではそのような負荷がなかったことで、状態不安の低下が生じたと考えられる。訓練効果が明確でなかった要因として、健常者を対象とした点、Bernstein & Zvielli (2014) で用いられた画像と比較して、感情価の効果が低いとされる単語刺激を使用した点、反応時間指標の信頼性の限界、注意処理段階を分離できない課題特性、提示時間を単一条件に限定した点が挙げられる。以上より、本研究は条件設定によって効果の検出が困難になった可能性があり、今後は対象者特性、刺激、フィードバック形式、測定方法を調整した検討が求められる。

## 限定広告による焦燥感が選択結果の後悔度に及ぼす影響

### 問題・目的

我々の商品購入に関する意思決定は、品質や価格以外の要因からも影響を受けている。布井他（2013）は、限定に関する文字情報（以下、限定ラベル）を呈示することで、商品の魅力度や選択率の向上が見られることを示した。こうした限定ラベルの効果は、希少性の効果によって説明されているが、入手が困難であることと、それによって魅力が高く感じるものとの間には論理的な乖離がある。本研究では、限定広告の効果のメカニズムを解明するため、選択のオーバーロード現象に着目した。この現象は、焦燥感が認知負荷として働き、ヒューリスティックな判断を促すことで、選択前は魅力度が高まるものの、選択後は後悔するといふものである。同様に、短期間での意思決定を消費者に迫る限定広告も、焦燥感を生起させ、ヒューリスティックな判断を誘発している可能性がある。本研究では、この焦燥感に着目し、限定広告の効果が、焦燥感によって生起したヒューリスティックな意思決定によるものであるか否かを検討した。具体的には、期間限定ラベルに限定し、この広告が認知負荷として働くならば、選択肢数が多い状況下では期間限定ラベルが付与されている方が後悔度、再選択率は高くなると予測した。

### 方法

大学生 31 名（男性 13 名、女性 18 名、平均年齢 20.67 歳、 $SD = 1.30$ ）を対象に個別実験を行った。本実験は、参加者間要因が限定（期間限定/限定無関連）、参加者内要因が選択肢数（少数/多数）の 2 要因 2 水準混合計画であった。実験参加者は、商品呈示された画像の魅力度を 6 段階で回答した後、購入したいと思う商品画像を 1 枚選択した。その後、選択した画像に対する満足度、後悔度をそれぞれ 6 段階で回答し、再選択するか否かを問うフェーズにおいて選択し直すと回答した場合には、もう一度画像を 1 枚選択した。

### 結果・考察

魅力度評定値について、2 要因混合分散分析を行った結果、限定の主効果及び交互作用には有意差が見られなかった。一方で、選択肢数の主効果において有意差が見られ、選択肢数が多い条件の方が魅力度評定値は有意に低いことが示された。布井他（2013）の結果とは異なり、限定ラベルによる魅力度の上昇は見られなかった。続いて、満足度評定値、後悔度評定値について、2 要因混合分散分析を行った結果、満足度評定値において、選択肢数の主効果は有意傾向であったが、それ以外では有意差が見られなかった。再選択率については、いずれの主効果及び交互作用にも有意差が見られなかった。以上の結果から、「手に入りにくいと欲しくなる」という限定広告の効果は、「今すぐ決めないと機会を逃す」という焦燥感が認知負荷を高めることによって引き起こされる、ヒューリスティックな意思決定によるものではないことが示された。

## 内受容感覚の鋭敏さとオノマトペによる身体感覚喚起性との関連

### —自伝的記憶の想起における検討—

#### 問題と目的

自伝的記憶研究において、イメージ喚起力が高い手がかり語ほど古い記憶を想起させることが示されている。しかし、オノマトペは一般的にイメージ喚起力が高いと考えられるにも関わらず、類似した意味を持つ一般語より新しい記憶が想起された（郷原他，2018）。この結果はオノマトペの持つイメージが一般語と質が異なる可能性を示している。特に、痛みに関連するオノマトペの呈示により、実際に痛みを感じたときと同一の脳部位が活性化することや（Osaka et al. (2004)）、感覚処理特性を持つ人はオノマトペの理解が困難である傾向から（佐々木他（2022））、オノマトペが身体感覚と深い関連を持つと推測される。身体感覚における反応は時間とともに減衰することから、この感覚に基づいて記憶を符号化することは困難であると考えられる。したがって郷原他（2018）により示されたオノマトペの特異性は、身体感覚喚起性の高さゆえ、オノマトペを手がかりとして記憶を想起する際は、より新規なものが対象となると説明される。加えて身体感覚喚起性の影響をどの程度受けるかは個人の特性が影響すると考えた。

そこで本研究は自伝的記憶研究の手がかり語法を用い、実験参加者の内受容感覚の鋭敏さと、手がかり語の身体感覚喚起性が、想起される記憶の年代に影響するかを検討した。オノマトペの持つイメージの豊かさが身体感覚喚起性によるものならば、身体感覚喚起性の高い語ほど新しい記憶を想起させ、内受容感覚の鈍麻な者は、語の持つ身体感覚喚起性の高低から受ける影響は小さいと予想した。

#### 方法

18歳以上40歳未満の146名（男性43名，女性103名，平均年齢24.10歳， $SD = 5.26$ ）が本調査に参加した。実験参加者は、内受容感覚を測る質問と、呈示された手がかり語から想起した記憶に関する10個の質問に答えるよう求められた。手がかり語は予備調査により選出し、身体感覚喚起性の高いオノマトペ，身体感覚喚起性の低いオノマトペ，具体名詞の3条件であった。

実験参加者の内受容感覚の鋭敏さ2群（高群，低群）×手がかり語3条件（高オノマトペ，低オノマトペ，具体名詞）の2要因3水準の混合要因計画を用いた。内受容感覚の鋭敏さは実験参加者間要因，手がかり語は実験参加者内要因であった。従属変数は自伝的記憶研究における10個の質問項目であった。

#### 結果と考察

10個の質問項目のうち、手がかり語によって想起された記憶の年代についてのみ交互作用が認められた。多重比較の結果、内受容感覚高群において具体名詞条件が高オノマトペ条件より有意に高かった。内受容感覚低群において、具体名詞条件が高オノマトペ条件，低オノマトペ条件より有意に高かった。

この結果は、手がかり語がオノマトペであれば身体感覚喚起性の高低に関わらず、具体名詞よりも新しい記憶を想起させることを示唆している。そのため今後は、具象性など身体感覚喚起性以外の要素を含めて検討する必要があることが明らかとなった。

## 校正課題遂行成績に関わる認知的要因の検討

### 問題・目的

我々は文法や文脈に沿わない文字列が含まれていても意味を補完し、誤りを見落とすことがある。これまでに、文節単位で提示したり文節や単語間に空白を入れたりすると誤字検出率が高まることが確認されている（下村・横澤，1990；Shimomura & Yokosawa，1992）。さらに読み困難を持つ児童を対象とした研究では、文節ごとに区切った教材が、読字速度や言い間違いを改善させることが報告されている（秋元，2021）。これらのことから、文字や文節単位の区切りが注意を適切に促し、誤字検出の向上につながる可能性が指摘できる。そこで本研究では、文章を文節ごとに区切ることが誤字検出率を向上させるか否かを検討する。具体的には、文節ごとに「/」を挿入するスラッシュ・リーディングの手続きを校正課題に応用する。なぜなら文節間に空白を入れながら文章を読むことは難しく、スラッシュを挿入する方がより実用的な手法だと考えるからである。この手続きにより読み手の注意が適切に配分され、より細かく文字処理が行われると考えられる。したがって、スラッシュ・リーディングを行う実験群の方が、特定の方略を用いない統制群よりも、校正課題における誤字検出数が多くなると予想した。

### 方法

大学生 52 名（男性 18 名，女性 34 名，平均年齢 19.17 歳， $SD = 1.07$ ）が参加した。参加者はランダムに統制群と実験群に分けられ，統制群に 25 人，実験群に 27 人が割り当てられた。実験計画は，1 要因 2 水準（統制群×実験群）の参加者間計画であった。参加者は 1200 字の文章を読みながら誤字を検出する校正課題に取り組んだ。その際，実験群は文節間にスラッシュを入れながら課題に取り組むことが求められた。

### 結果・考察

統制群の誤字検出数の平均は 6.68 個（ $SD = 2.30$ ），実験群の誤字検出数の平均は 6.67 個（ $SD = 2.26$ ）であった。両群について，誤字検出数の平均に差があるか否かを  $t$  検定によって検討したところ，有意差は見られなかった。しかしながら，実験群においてスラッシュ数と誤字検出数の関係性を検討したところ，両変数の間に中程度の有意な正の相関が認められた。すなわち，スラッシュ数が多い参加者ほど，誤字検出数も多いことが示された。以上の結果から，スラッシュ挿入は誤字検出を一律に高めるものではないが，文節を細かく区切るといった処理方略を取る読み手においては有効に機能する可能性が示された。本研究ではスラッシュ数の多寡を生じさせる要因については検討していないため，今後は読み手の性格特性や文法知識などの要因を統制し，どのように工夫すればスラッシュ数が増えるのかを検討することが求められる。